
水無川

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水無川

【Nコード】

N9453I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

農民の一郎に近づく不可思議な女、おりゆう。やがて二人は合い惚れとなるが、悲劇が待ち受けていた。

昔、大きな川のほとりに村があった。川は村の田畑に潤いをもたらしてはくれるが、何年に一度か大水を出し、田畑を荒らすばかりか、尊い人の命まで奪ったのである。

この川のほとりの村に一郎という百姓がいた。一郎の田圃は川の土手の脇にあり、一郎は昼時になると土手に上り、川を眺めながらいつも弁当を食べていた。一郎は村の中でも働き者と評判の男で、朝早くから日が暮れるまで田圃で泥まみれになって働いていた。

そんなある日の夕暮れ。一郎は自分を見つめる一人の娘の目に気付いた。娘は大層美しく、一郎の心をすぐに捕らえた。また娘も、そんな一郎につこりと微笑みかけたのである。

「一郎さん……ですね？」

娘は顔を赤らめながら、一郎に話しかけてきた。

「ああ、そうだが……。あんたは？」

「おりゆう……」

一郎はおりゆうがこの付近の村の娘でないことは、一目でわかった。おりゆうの身につけていたのは、それは美しく優雅な着物であったし、百姓の身なりではなかったからである。

一郎はおりゆうがどこかの武家の娘かと思い、一瞬沸いた恋心が切なくも苦しく彼を苛んだ。百姓と武家では身分が違う。惚れ合った仲でも一緒になれるはずもなかったのである。

「おりゆうさんとやら、もう日が暮れますぜ。早く帰った方がいい……」

そう言い放つと一郎は田圃を後にした。だが後ろからおりゆうの声が出た。

「待ってください！」

その声に一郎が振り向く。するとそこには、涙を一杯に溜めたお

りゆうが立っていた。

「私はあなたを遠くから毎日見ていたのです。そしてついにお許しをもらって、あなたの元へ参ったのです」

そのおりゅうの言葉に、さすがに一郎も愕然とした。

「お許しをもらったと？」

「はい」

おりゅうは力強く頷いた。一郎の心の中には、先程切なくも諦めかけた恋心が、再びムクムクと頭を擡げ始めた。

その日の夜、一郎はおりゅうに立派な屋敷へと案内された。屋敷には家来はおろか誰ひとり見当たらない。

そして一郎はまず居間へと通された。神棚には立派な玉が飾つてある。一郎がそれに目を奪われていると、おりゅうが湯殿の支度ができているという。

おりゅうに促されながら湯殿へ向かう一郎だが、生活の匂いがまったくしない。果たしてここが、本当にこの世なのかとも疑いたくなる程だ。一郎は狐か狸にでもたぶらかされているのかとも疑うが、おりゅうの微笑みを見る度に、その猜疑心も掠れてしまうのだつた。湯殿では一郎もおりゅうも一糸纏わぬ姿になり、その身を湯船に預けた。一郎の身体からは、きつかった仕事での疲れが嘘のように抜けていく。

ただそれ以上に、おりゅうの透き通るように白く、細い裸身が目に見え、に焼き付き、離れなかつた。

(女子の身体とはここまで美しいものか……)

一郎は感嘆し、桶で湯を汲むおりゅうの姿を、呆然と見つめていた。

だが一郎も男である。その美しい肢体に劣情を抑えぬことは無理からぬことか。

湯船から揚がった一郎は、おりゅうの肩に手を伸ばす。一郎の手が触れると、おりゅうが振り返った。その妖しいまでの流し目に、

一郎の想いは更に高ぶったのである。

「こちらに……」

湯殿の隣は床の間であった。既に豪華な床が整えられており、おりゆうは一郎の手を引いて誘う。

一郎は若さに任せて、力一杯おりゆうを抱き締めた。腕の中で軋む華奢な肢体。鼻をくすぐる濡れたような黒髪。胸に当たる膨らみの感触。すべてが一郎を興奮させる材料だった。

「ああ、おりゆう……」

「私を抱くということは、私と夫婦になってくださるということですね……？」

おりゆうがやや真剣な眼差しで、一郎の目を見据えて言った。

「おお、そうとも。夫婦になるともよ……」

そう約束した一郎はおりゆうの乳房に顔を埋めた。初めて知る女の柔肌である。一郎は欲望のままに、その震える蕾を吸い、心行くまで感触を楽しんだ。

そして二人は結ばれたのである。

おりゆうは眉間に皺を寄せ、唇を噛みながらも、どこか幸福そうな顔をしている。

そう、この時、二人は限りなく幸福だったのである。

一郎が村へ戻ってから、おりゆうは夕暮れになると、毎日一郎の元へ現れるようになった。

これが村の噂になったことは言うまでもない。何せ、おりゆうの着物は武家を連想させるものであり、武家と百姓の婚礼など許されるはずがなかった。一番心配したのは一郎の両親で、彼の身に何か不吉なことが起こらないかと、いつも心配していた。

しかし一郎は「許しは得てある。心配ない」と言うばかりで、毎晩おりゆうと出掛けてしまうのだった。

ある夜のこと。村の衆がこっそり一郎とおりゅうの後をつけることにした。

すると一郎とおりゅうは川の中へと消えていったのである。

これに慌てた村の衆は翌朝帰ってきた一郎を問い詰めた。しかし一郎は「おりゅうのお屋敷に行っていた」と言っ譲らないのである。

村の衆や両親は「お前は妖怪にたぶらかされているんだ」と説得したが、無駄なことであった。一郎は「私はおりゅうと祝言を上げます」と言って聞く耳を持たなかった。

「一郎ひとりの問題ならいいが、このままだと村全体が危ない目に遭うかもしれねえ！」

業を煮やした村の衆と両親は、とうとう一郎に猿轡を掛け、納屋の柱へ縛り付けてしまったのである。

夕方になって一郎を呼ぶおりゅうの声がする。それは一郎の耳にも届いた。しかし猿轡を掛けられ、声が出せないもどかさが一郎を襲う。

「んんっ！！」

一郎は猿轡を嵌められた口で、精一杯叫ぶ。心は「おりゅう！！」と叫んでいた。しかし悲しいかな、おりゅうが一郎のいる納屋を見つけることはなかったのである。

こうして、一郎を呼ぶおりゅうの声は夜中から、朝日が差し込む直前まで響いた。

そして、一郎はこの苦痛に一週間も耐えなければならなかった。

一郎が縛られて一週間もすると、おりゅうの声は聞こえなくなつた。村の衆も「とうとう諦めたか」などと笑い、胸を撫で下ろしていた。こうして一郎を縛っていた縄と猿轡は解かれたのである。

それからというもの、一郎は田圃へ行くこともなく、毎日を家の

中で過ごしていた。

「ちったあ働け。この穀潰し」

両親や村の衆からなじられても一郎は田圃へ行こうとはしない。ひねもす家の中でゴロゴロしているだけであった。

そればかりか一郎は食も細くなり、ほとんど何も食べなくなった。その身体は見る見るうちに痩せこけていき、骨と皮だけになってしまったとか。

村の衆はそんな一郎を見て「妖怪憑き」などと噂し、避けるようになったのである。

一郎にしてみれば、ただ好いた女と一緒にたかっただけであった。それに周囲がやつかみを入れた揚げ句、自分を中傷しているとした彼には思えなかつたのである。

「ああ、もう生きてなんかいたくない……」

そう呟いた一郎は最後の力を振り絞るようにして、川に架かる橋へと走っていった。村の衆はもはや一郎には村八分を決め込んでいる。彼の方を振り向く者など誰一人としていなかった。

一郎は橋の中央にまで来ると、勢いよくその身を川に投げた。その様子を何人かの村の衆が見て、初めて事の重大さに気付いたのである。しかし一郎の身体は、滔々と流れる川の流れに飲み込まれてしまい、姿を確認できない。あつと言う間に人だかりができた。

すると程なくして川は渦を巻き、その水は天高く舞い上がった。

そして川の水は大きな龍へと姿を変えたのである。

龍は一郎を抱えていた。その玉のような目は深い哀しみを湛えているように見える。

「オオオオオーツ！」

龍は哀しそうに吠えると、一郎を抱いたまま天高く昇っていった。そして雲の裂け目へと、その姿を隠してしまったのである。

「見る、水がない……！」

村の衆の一人が橋の欄干から川を覗き込んで叫んだ。その声を聞いた村の衆たちは次々に川を覗き込む。

そこには所々に水たまりがあるだけで、水が流れていなかったのである。

村の衆はすぐに龍神を祀った祠を建て、龍を呼び戻そうとした。川がなければ田畑は枯れてしまう。確かに川は時々暴れ、田畑を荒らしたり、人に危害を加えたりはするが、川は村の存続になくはない存在なのだ。村の衆は龍と一郎に心から詫び、祈った。しかし龍と一郎が再び戻ってくることはなかったのである。

それ以来、川の水は涸れたままで、人はこの川を「水無川」と呼ぶようになったそうである。

(了)

(後書き)

「僕の村は釣り日和」のラストに出てきた昔話。スピノフというところでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9453i/>

水無川

2010年10月8日15時25分発行